

# シャドーイングコース開設に向けての基礎研究<sup>i</sup>

## Basic Research for the Establishment of a Shadowing Course

戸田貴子・劉佳琦

TODA Takako・LIU Jiaqi

早稲田大学日本語教育研究科：〒169-8050 東京都新宿区西早稲田 1-7-14

Graduate School of Japanese Applied Linguistics, Waseda University

toda@waseda.jp, liujq@akane.waseda.jp

**Abstract** : In this paper, we developed shadowing practice material and conducted lessons. The classes were recorded using digital video cameras and analyzed. The observations reveal that the pause plays an important role in the shadowing practice. Also, it was found that shadowing tends to occur at the sentence-final positions, when the learners cannot follow the complete sentence.

キーワード：シャドーイング、教材開発、授業実践、シャドーイング行動、発話速度、ポーズ

### 1. はじめに

シャドーイングは英語教育や通訳養成などで導入されている訓練方法として知られている(玉井 2005)。

成人してから日本語学習を開始したにも関わらず、ネイティブレベルの発音習得を達成した複数の学習者成功者を対象としたフォローアップ・インタビューから、その共通点のひとつとしてシャドーイングを実践し、継続していることが明らかになった(戸田 2006a)。この結果を踏まえた上で、本研究では以下のことを行った。

1. シャドーイング教材の開発
2. シャドーイング授業の実践
3. シャドーイング行動の分析

1. のシャドーイング教材サンプルの作成は劉、2. のシャドーイング授業の実施および3. のシャドーイング行動の分析は戸田が担当した。

### 2. シャドーイング教材の開発

シャドーイング教材サンプルはテレビドラマ「トップキャスター」(フジテレビ)の一部を使用して作成した。ニュース番組のトップキャスターである「つばき」とつばきの助手である「あすか」の会話で、ビデオは約3分間である。

シャドーイング教材サンプルは1) 登場人物・場面、2) スクリプト、3) 練習のポイント、4) 解説、5) 練習問題から構成されている。練習問

題は戸田(2004)を参考にして作成した。以下はスクリプトの一部である。

つばき：ねえ、なんかものすごくコーヒー  
飲みたくない[ ]①<sup>ii</sup>。

あすか：それって、入れろってことですか。

コーヒーって、いったいどうやって。

### 3. シャドーイング授業の実践

早稲田大学日本語教育研究センター設置の発音クラス3・4レベル(初中級)、5・6レベル(中級)、7・8レベル(上級・超級)のクラスでシャドーイング授業を実施した。所要時間は約30分である。授業の様子は学生の許可を得て、4台のSONYデジタルHDビデオカメラレコーダーを使用し、DVD-RWに録画した。

### 4. シャドーイング行動の分析

本稿では7・8レベルのシャドーイングの授業に参加し「あすか」役を担当した韓国人学習者5名を対象に、シャドーイング行動を分析する。<sup>iii</sup>登場人物と場面を説明した直後に、連続二回シャドーイングを行った。練習問題はシャドーイングのあとで行った。総発話数30回中に観察された学習者のシャドーイング行動は表1のとおりである。<sup>iv</sup>なお、本稿では自然な発話速度のドラマを用いたシャドーイングの生起頻度と生起箇所に着目しているため、シャドーイング練習の効果検証は別に稿を起こして報告したい。

表1 シャドーイング行動の分析

一回目	平均	%
1. 総発話数	30	100%
1-1. シャドーイング有	28.4	95%
1-2. シャドーイング無	1.6	5%
2. 1. 生起箇所		
2-1. 文頭から文末まで	21.2	71%
2-2. 文頭から途中まで	1	3%
2-3. 途中から文末まで	3.6	12%
2-4. 途中から途中まで	0	0%
2-5. 文頭から数回途切れる	2.6	9%
二回目	平均	%
1. 総発話数	30	100%
1-1. シャドーイング有	29	97%
1-2. シャドーイング無	1	3%
2. 1. 生起箇所		
2-1. 文頭から文末まで	22	73%
2-2. 文頭から途中まで	1.8	6%
2-3. 途中から文末まで	2.8	9%
2-4. 途中から途中まで	0.2	1%
2-5. 文頭から数回途切れる	2.2	7%

まず、5名中4名の学習者がテレビドラマの発話速度に概ねついていけることがわかった。DVD観察記録にも「発話速度にも十分ついていける」「発話に重なるようにリピートできている」という記述が見られる。一回目が平均 95%、二回目が平均 97%という高い割合でシャドーイング行動を行っている。

さらに、シャドーイング行動の内訳を詳しく見ていくと、文頭から文末までできているのは一回目が平均 71%、二回目が平均 73%であった。一方、文頭から文末までできない場合は長文に多く、途中から文末まで再生することが最も多かった。次の発話の太字部分がその一例である。

**あすか:** コーヒー豆とか、コーヒーマーカーって、  
**いったいどこにあるんですか。**

シャドーイング行動が観察されなかった「シャドーイング無(表1)」は平均 1.6回と少ないが、

以下の例のように「あすか」が感情的になり、両者の発話が重なり合うようにターンテイキングが行われる場合、十分なポーズがないためシャドーイングがしにくいように見受けられた。

つばき: でしょう[ ]④。

あすか: ってクローゼットじゃないですか  
 [ ]⑤。

つばき: **大丈夫、大丈夫、全然洋服持っていないから。**

あすか: **そういう問題じゃありません。**

## 5. まとめと今後の課題

本研究の対象者のためのシャドーイング教材の開発には自然な発話速度が好ましく、適度なポーズが求められることがわかった。今後は本研究の成果をもとに 2007 年度春学期に開設予定のシャドーイングコースの運営を行うとともに、音声・映像を伴うシャドーイング用 DVD 教材を開発する予定である。

## 参考文献

- 玉井 健 (2005) 『リスニング指導法としてのシャドーイングの効果に関する研究』 風間書房.  
 戸田貴子 (2004) 『コミュニケーションのための日本語発音レッスン』スリーエーネットワーク.  
 ----- (2006a) 『第二言語における発音習得プロセスの実証的研究』平成 16-17 年度文部科学省科学研究費報告書.  
 (http://www.gsjal.jp/toda/に全文掲載)  
 ----- (2006b) 「日本語発音練習のためのシャドーイング教材の開発」カナダ日本語教育振興会 2006 年度年次大会、トロント大学、2006 年 8 月 26 日.

<sup>i</sup> 本研究は文部科学省科学研究費補助金基盤研究(B) 課題番号 18320094 (研究代表者: 戸田貴子) の研究成果の一部である。

<sup>ii</sup> シャドーイング後に、スクリプト中の[ ]にイントネーションの特徴を記述し、表現意図との関係を意識化する練習問題ができるよう構成されている。

<sup>iii</sup> 発音 3・4 レベルのシャドーイング行動の特徴は戸田 (2006b) で報告した。

<sup>iv</sup> DVD 映像資料の分析は研究補助を依頼し、謝金を支払った。